

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26503014

研究課題名(和文)「1945年東京都市写真データベース」構築による都市の写真記録に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Research on photographic recording of urban space through construction work of "Tokyo 1945 Photographic Database"

研究代表者

佐藤 洋一 (Sato, Yoichi)

早稲田大学・社会科学総合学院・教授

研究者番号：10277832

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、終戦を挟む1945年に東京で撮影された写真にはどのようなものがあるのか、そしてそれは東京の何をどう記録しているのか、について考えるものである。に関しては、アメリカに所在している公的な写真(軍関係の公式写真)や一部個人が撮影したものを中心に収集し、また一部国内の写真家による写真もその原板の調査を行った。それらの調査をもとにの考察としては大きく「何が写っているのか」「どのように撮影されたのか」「なぜ撮影されたのか」という3つの視点が欠かせない。写真集の出版、および雑誌への寄稿により、成果を発表している。なお、今回収集した成果を広く公開すべく引き続き作業を行っている。

研究成果の概要(英文)：Aims of this research are clarifying mainly two problems that 1)how various photograph taken in 1945 year Tokyo are and 2)what those photograph recorded of urban space of Tokyo. About problem1), I have collected official and private photographs taken by US forces persons through research in many archives in United States. Beside that, I have also researched photograph and their negative films taken in Tokyo by Japanese Cameraman through the year of 1945 in between the end of war. For thinking about problem2), it is necessary three points of view that "what are taken in the frame of the photograph""how the photograph were taken""why the photograph were taken". I published a photobook and some articles in some magazines. I am going to research to open my collections and research result to the public mainly through website.

研究分野：都市史

キーワード：都市写真 空襲 写真アーカイブズの活用 菊池俊吉 戦災復興 米軍 都市空間 都市イメージ

1. 研究開始当初の背景

終戦を挟んだ前後の時期は、我が国の都市の写真記録の空白期であり、メディア等で紹介される写真もごく限られたものであった。しかし、実際のところ、東京だけを限ってみても、米国などには実は多くの写真記録が残されている。

つまりいままであまり誰も本腰を入れて調べてきた人間がいなかったということであり、その時その時で必要な写真だけを選び(場合によっては使いまわして)使われてきたのではないだろうか。こうした認識を背景に本研究は構想された。また個人的な背景として20年ほどまでに米国立公文書館で東京の写真の調査をしていたことがあり、その調査の続きでもあった。20年前に実感した「写真史料のジャングル」へ再び挑むべきではないかという考えである。

2. 研究の目的

研究の目的として設定しているのは、大きく、終戦を挟む1945年に東京で撮影された写真にはどのようなものがあるのか

そしてそれは東京の何をどう記録しているのかの2点である。

3. 研究の方法

本研究は、収集、分析・考察、成果の公開というフェーズがあった。以下、個別に述べていく。収集の中心となったのは米国に所在する写真史料である。

3-1. 米国での調査

1) NARA II

米国国立公文書館(NARA II)にて、4回にわたり調査を行なった。主要な対象は、以下の4つのレコードグループである。それぞれに関して該当する写真調査を行った。基本的にはスキャンニングにより複写をした。

RG80 "General Records of the Department of the Navy"

RG111 "Records of the Office of the Chief Signal Officer"

RG243 "Records of the United States Strategic Bombing Survey"

RG342 "Records of United States Air Force Commands, Activities, and Organizations"

2) フロリダ州立大学

調査の過程で、いくつかの個人コレクションの所在を知ることとなった。そのうちm今回重点的に調査したのは、フロリダ州立大学第二次世界大戦と人々の経験に関する研究所(The Institute on World War II and the Human Experience)所蔵のOliver.L.Austin撮影のカラーライドコレクションである。同大学ではすでに写真をweb上で公開しているが、関連情報はあまり明らかにならなかった。同研究所の協力も得て、同コレクションの写真のインデキシングを行った。他にも個人アルバムを調査し、終戦期における個人撮影写真の事例の検討材料を入手した。

3-2. 日本での調査

1) 国内の刊行物に使用されている写真のデータベース化/1945年の東京に関するイメージの受容

をトレースするため、国内の刊行物20点ほどの(写真集、ムックなど写真を中心とした書籍)の該当する部分をスキャンニングし、データベースの制作を開始した。

2) 菊池俊吉家での調査: これまでの準備調査の結果に基づき、菊池家所蔵のネガフィルムを借用し、撮影内容や撮影行為の分析を進めた。関連で以下を発表した。(「報道写真家菊池俊吉 町を見るまなざしの復興」雑誌『東京人』2016年9月号pp14-25)

3) 国内の機関が所有するもの

江戸東京博物館、国立国会図書館が所蔵する<個人コレクション>にあたる写真も調査している。

4. 研究成果

4-1. コレクションごとの特質の把握

日本にきた占領軍の数は1946年2月時点で41万7千人といわれており、そこでは様々な写真が撮られたことであろう。彼らの撮った写真のなかでよく知られているものは、公的な位置づけを持った占領軍の各軍による写真や戦略爆撃調査団、あるいはマスメディア系の撮影等公共的な性格のある写真である。

占領期の東京に限ったことではないと思うが、ある時代のある地域を撮った写真には、そのアクセシビリティに応じて層がある。公的な写真はアプローチしやすく、ことにプレスリリースで報じられたものは、その時点においても占領軍が伝えなかったイメージでもあった。そうした写真は撮影当時のみならず、のちにもたびたび引用されるため、今日においても触れるチャンスが多い。よく知られている写真の多くはこの第一層に属するもので、こうした写真によって我々の都市イメージは形成されている面があるだろう。その次の第二層は、公共的な写真であるが、そのまま報じられたり取り上げられることのなかった写真である。例えば、ある事件や事象を撮影したカットのうち、プレスリリース等で、撮影当時に二次利用がされなかったカット、といったものであり、本研究での収集の中心はこの第二層にあたる部分である。本研究では中でも国立公文書館(NARA II)に収蔵されているものを主に調査収集した。これらは公的な性格を帯びてはいるので、特に米国の場合は、公的な施設等に所蔵されていれば、アクセスは難しくはない。そしてその奥の第三層にあるのが、個人により撮影され、そのまま所蔵されていた個人コレクションである。

4-1-1. NARA II (第二層)

RG80 米海軍省記録は、主に各戦艦のカメラマンたちが撮影した記録や艦載機が撮影した写真群である。小笠原や沖縄、硫黄島など、徐々に東京へと近づき、8月15日以降は艦載機による都内上空の偵察飛行、捕虜収容所の開放、そして8月末には富津や横須賀、あるいは横浜など、東京湾から上陸していく過程が記録されている。東京に限らず、戦艦のカメラマンが陸上で撮影しているものも少なからずある。1945年頃の海軍の写真は、空撮用の大フォーマットで撮られている場合が多く、情報量が多い。

RG111 米陸軍通信隊記録は、主に陸軍および陸上での活動を記録しているもので、その一部は米軍の新聞 "Stars & Stripes" にも使われている。撮影対象が多岐にわたるため、彼らの活動拠点などを知るには最も都合がよい。報道そのものと結びついて、トピック性の強いテーマを撮影した写真も多い。この時期の写真は、基本的には4×5インチフォーマットのスピードグラフィックというカメラで撮られている。

RG243 米戦略爆撃調査団記録は、その名の通り、調査団が発行した調査報告書に使われた調査記録としての写真が主である。報告書のテーマに即して撮影された写真は、テーマごとに通し番号が振られ、撮影地や撮影者などが記載されている。「民間防空」に関わるものには、市街地内の防空壕や防火用水、あるいは防空偽装建築などの写真が含まれている。

RG342 米空軍記録は、主に空撮の写真で、東京空襲の際に上空から撮影したものが中心であるが、一部地上での撮影したものも含まれている。

4-1-2. 個人コレクション (第三層)

占領軍関係者は、私的な時間にも写真を撮っている。そのコレクションは膨大な数を数えるものと思われるので、本研究で見ることができたものはそのごく一部に過ぎない。これについては今後の研究課題をしていくが、概ね以下のような傾向があることを指摘できるだろう。

観光から居住へ/彼ら自身との日本との関わりを考えると、外来者でありつつ、ある一定の時間を過ごしながら、日本に住み着いていったという点が特徴的である。よそ者から住み手へと変容していくに伴い、そのまなざしも変化していく。

戦勝国的世界観/一方で彼らは勝ち組であり、その証として、彼らでしか見ることのできなかつた風景があったこともわかる。旧ドイツ大使館の写真、戦闘機の武装解除の写真、英語標識の写真などは、そうした意識が投影されているようにみえる。また、彼らの活動拠点になっていた都市内の接收地の状況は、東京の中にあつた OCCUPIED TOKYO というもう一つの世界のありさまを写しているようだ。

新たな風景の目撃者/町中の写真で共通するのは、焼跡に新築した建物の写真である。その数は、思いのほか多いといってよい。ことにカラー写真の場合、ピカピカの建物のある種に華やいだ雰囲気を感じられる。新しいお店は英語の看板がほぼ全て掲げられていて、彼らにとっても視認性が高い風景であったことは間違いない。一つ一つは規模の小さい個店であるが、結果的に復興期の都市空間のよいドキュメントたりえていることが興味深い。

専門的なまなざし/今回見たコレクションの撮影者に共通するものとして、民間人として占領軍内部でなんらかの専門的な職業についていたという点がある。ことに鳥類学者であったオースティンの写真には、その専門性が顕著に現れている。

4-2. 場所の同定について

今回調査した写真の多くは、場所についてのキ

ャプションがないものであつた。つまり写真から撮影された場所を推定し、確度をあげ、同定するという作業が必須になる。公的な施設に所蔵されている写真の場合、すでに撮影者の手を離れており、収蔵にあつて聞き取りなどを行なっていない限り、撮影場所に関する情報は自ら写真を読み込まない限り得ることはむずかしい。まして、米国に所蔵されたものは、所蔵者には場所に関する知識がないことが通常である。さらに言えば、時間的な隔たり、すなわち70年ほどの時間が経過していることが、この作業にさらなる困難さをもたらしている。

こうした写真の読み取りには相応の知識と技術が必要になっている。写された時期、場所の割り出しはもちろんのこと、被写体についての理解をもとにその写真がどのような人物によって撮影され、どのような意味と価値を有するののかについて、正確な推論をする必要が出てくる。つまり今後、読み取りのための技術や知識をどのように外在化できるか。写真のことを全く知らない後続の世代でも、関わりうるような写真の読み方の一般化を考えるべき時が到来している。

本研究では、場所の同定に関して、ある程度の方法論を積み上げることができた。写真を読み取るにあつて、そこには3つの次元が存在する。すなわち、

何が写っているのか(what)

どのように撮られたのか(how)

なぜ撮られたのか(why)

の3つであり、大まかにいえば は画面内の情報のよみとり、 はカメラや撮影者の情報のよみとり、 は写真撮影行為の文脈のよみとり、ということになる。

この3つの次元が相互に絡み合いながら、写真の読み取りを行い、その過程を経て、写真撮影場所の同定が行われることになる。

4-3. 収集した写真から写真集をつくる

収集した写真をもとに写真集『米軍が見た東京1945秋』を編集、出版した。以下、編集上の観点を示す。

1) クロニクル <物語的な解釈>を排して、時間軸、空間軸に沿った形で以下の観点から整理/編集していった。空襲エリアを時系列的に追える形で写真をセレクトし、同エリアで被災した日本人による手記と地図を併記した形で編集した。

2) 視線を追跡する ~多岐にわたる米軍写真を以下の3つの形で編集した。 皇居を一周する、 山手線を一周する、 隅田川/荒川を巡る。

3) エリア ~以下にあげる10のエリア別に整理した。 浅草、日本橋・京橋、銀座、新橋・虎ノ門、築地・湊・月島、芝、芝浦・台場、立川、武蔵野、朝霞

4) 消えた風景、消えた場所 ~戦時下において現れ、特徴的といえる風景をや場所を以下の6からまとめた。 なくなったもの、 偽装建築、 防空壕、 防火体制、 高射砲陣地、 捕虜收容所

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7件)

佐藤洋一「外国人の撮った、占領期のカラー写真」所収:『東京人』、査読なし、33(4) 2018年4月号 p10-23

佐藤洋一「集め、読み取り、伝えること ~米国立公文書館から発掘した貴重写真」所収:『東京人』、査読なし、2016年9月号 p82-85

佐藤洋一・古本隆男・米野雅之「鼎談 青い目の鳥類学者が見た終戦直後の日常 オリバー・L・オースティンが撮った総天然色の東京」所収:『東京人』、査読なし、2016年9月号 p38-47

佐藤洋一「菊池俊吉 ~町を見るまなざしの復興」所収:『東京人』、査読なし、2016年9月号 p12-25

佐藤洋一「米軍が撮影した終戦直後の「帝都」」所収:『アサヒカメラ』、査読なし、2015年9月号 p99-107

佐藤洋一「ドキュメント 敗戦から進駐まで 米海軍記録写真に見る八日間の足跡」所収:『軍都東京 占領下の東京』、査読なし、洋泉社 p18-31 2015年

佐藤洋一「都市と写真、都市の写真」所収:『アサヒカメラ』、査読なし、2014年8月号 p94-95

[学会発表](計 1件)

佐藤洋一『わたしの写真がみんなの写真になるとき ~占領期の個人写真を通じて』(於:早稲田大学) 20世紀メディア研究会 2017年5月

[図書](計 4件)

佐藤洋一「地域資源としての写真」(所収:土方正夫編『地域計画情報論』成文堂、2018、P85-106)

佐藤洋一共編『台東原風景』台東区教育委員会、全192ページ、2015

佐藤洋一『米軍が見た東京 1945 秋』洋泉社、全224ページ、2015

佐藤洋一「オースティン・コレクションの特質について」(所収:『希望を追いかけて ~フロリダ州立大学所蔵写真展』昭和館、2018、

p50-54)

[その他](計 5件)

佐藤洋一(キュレーション) 写真展“Tokyo Year Zero(東京零年)” Tokyo Little House (東京・赤坂), 2018

佐藤洋一(映像ディレクション)『同じ場所』(Oliver L. Austin Jr.コレクション、リサーチ映像)(7分50秒)、昭和館、2018

佐藤洋一(映像ディレクション)『オースティンと東京』(Oliver L. Austin Jr.コレクション、リサーチ映像)(15分43秒)昭和館、2018

佐藤洋一、佐々木友輔「場所の経験を記録する 映画と都市のイメージ」web マガジン:『10+1 website』 2017年8月 <http://10plus1.jp/monthly/2017/08/issue-03.php>

佐藤洋一「写真アーカイブズ 歴史を振り返り、再発見する手段」web マガジン:『10+1 website』 2016年9月 <http://10plus1.jp/monthly/2016/05/issue-01.php>

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐藤洋一(SATO Yoichi)
早稲田大学・社会科学総合学院・教授
研究者番号:10277832